

言葉は時空を超えて —ゲーテ『西東詩集』より—

大杉 洋

はじめに

ゲーテは 1814 年、はじめて中世ペルシアの詩人ハーフィースの詩をドイツ語訳で読んだ。この時、ゲーテは 65 歳になっていた。ハーフィースの詩集との出会いに先立つ数年間において、彼は親しく付き合っていた人たち、すなわちヘルダー、シラー、アンナ・アマーリア王妃、母親等と死に別れ。自分自身も老齢を意識し始めていた。が、この書物に深い感銘を受け、ゲーテが 1819 年に出版した『西東詩集』においてみられる言葉づかいは、きわめて生き生きとしている。中世オリエント文学との邂逅を通じて詩人ゲーテは若返った、と言っても差し支えないだろう。

さて、『西東詩集』冒頭の詩「遁走」においてすでに、詩人のオリエントに対する熱い想いが歌われている。

Hegire.

Nord und West und Süd zersplittern,
Throne bersten, Reiche zittern,
Flüchte du, im reinen Osten
Patriarchenluft zu kosten,
Unter Lieben, Trinken, Singen
Soll dich Chisers Quell verjüngen. (WA-I, Bd. 6, S. 5)¹

遁走

北も西も南も裂ける、
玉座は砕け、国々は震える、
逃れたまえ、きよらかな東方で

¹ 本稿で引用するテキストは、以下のものを用いた：

Johann Wolfgang Goethe: Werke. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. Weimar 1887-1919. 本稿では WA と略記する。

族長の気を味わうため、
愛し、飲み、歌い、
キーゼルの泉で若返るのだ。

当時のヨーロッパ世界も、さまざまな分野において、長い歴史と伝統を抱えて疲弊していた。その行き詰まりを打開しようとするかのように、フランス革命が起きたが、それに続くナポレオン戦争はヨーロッパ全土を混乱に陥れてしまった。詩「遁走」においては、このようなヨーロッパの現状を踏まえ、中世オリエントの叡智によりどこを見出そうとする詩人の姿勢がうかがえる。

行き詰まったヨーロッパ世界の外に、可能性を見出そうとする試みは、ゲーテの青年時代においても見られる。シュトゥルム・ウント・ドラング期のゲーテの関心は新大陸アメリカに向けられていた。ゲーテは、疲弊したヨーロッパに代わって理想の国家がアメリカに建設される可能性を見出していた。が、そのアメリカ観は時代の進行とともに変容していった。その過程は、小説『ヴィルヘルム・マイスター』のなかで描かれている。

ゲーテの生きた時代は、近代ヨーロッパの胎動期に当たり、科学技術の発達を背景に、しゃかいのさまざまな領域において目まぐるしい変化が進行していった。これまでの伝統に根ざした価値観が役に立たなくなった一方で、それに変わるものは確立されておらず、人類の行く末を見通すことは不可能だった。ゲーテは若いときには、新大陸アメリカの未来において理想の国家が建設される可能性を感じた。そして自分の晩年を意識しはじめ、ハーフィースの詩集と邂逅したゲーテは、中世オリエントに精神的「逃避」の場を見出したのである²。

『西東詩集』におけるオリエント賛美は、熱い想いの伝わる言葉づかいで綴られている。例えば、詩人は、東洋の詩人を手放しで賛美している。

Gesteht's! die Dichter des Orients

Sind größer als wir des Occidents. (WA-I, Bd. 6, S. 122)

白状しよう！ 東洋の詩人たちは
西洋の詩人たちよりも偉大なのだ。

が、当時のゲーテがヨーロッパに対してすっかり背をそむけてしまった、と見なすのは一方的すぎる見方だろう。ゲーテは、詩人である自分を刺激してくれる素材はためらうことなく吸収した。

² S. Ileri, Esin: Goethes "West-östlicher Divan als imaginäre Orient-Reise. Sinn und Funktion. Frankfurt am Main und Bern 1982.

が、自分自身の存在の地盤を揺るがせることはなかった。『西東詩集』においても、くりかえし東洋を賛美する一方で、詩人ゲーテの本領が随所で発揮されている。そして、そこからは洋の東西を問わず存続し続ける、人間の普遍的な諸相が垣間見えてくる。本稿では、詩と言葉、そして愛というテーマを取り上げて、このことについて考察してみたい。

1. 詩と言葉

中世ペルシアの詩人たちとの邂逅がきっかけとなって生まれた『西東詩集』において、ゲーテは、詩や言葉について再考し、それを表現している³。「ハーフィースの書」においては、中世ペルシアの詩人たちの代表者の一人であるハーフィースへの敬意が雄弁に語られる。ここではまず、ハーフィースの詩の特質について述べられた、注目すべき箇所を取り上げてみたい。

Unbegrenzt.

Daß du nicht enden kannst, das macht dich groß,
Und daß du nie beginnst, das ist dein Loos.
Dein Lied ist drehend wie das Sternengewölbe,
Anfang und Ende immerfort dasselbe,
Und was die Mitte bringt ist offenbar
Das was zu Ende bleibt und Anfangs war. (WA-I, Bd. 6, S. 39)

限りなく

終わることができないということ、それがあなたを偉大にします。
あなたが始めることが決してないということ、それはあなたの運命です。
あなたの歌は星の蒼穹のように回り続けています。
始まりと終わりは、いつも同じなのです。
そしてまん中に位置するものは、明らかに
終わりにもあり続け、また始まりにあったものなのです。

³ S. Lemmel, Monika: Poethologie in Goethes west-östlichem Divan. Heidelberg 1987.

ここでは、詩におけるツィクルス(Zyklus)に言及されている⁴。始めに取り上げられたテーマが、くりかえし現れては展開してゆき、最後にはまた元に戻って、いわば円環を形成するのである。この形式は、時間は円環的に流れていくものであるという東洋の歴史観と一致している。もとより、自然研究に長年いそしみ、植物の成長を観察し続けてきたゲーテにとって、この歴史観は受け入れやすいものであった。植物もまた、芽生え、茎や葉を伸ばし、花を咲かせ、実を結ぶという営みを成就した後、枯れて姿を消してゆくからである。

Offenbar Geheimniß.

Sie haben dich, heiliger Hafis,
Die mystische Zunge genannt,
Und haben, die Wortgelehrten,
Den Werth des Worts nicht erkannt.

Mystisch heißest du ihnen,
Weil sie Närrisches bei dir denken,
Und ihren unlautern Wein
In deinem Namen verschenken.

Du aber bist mystisch rein,
Weil sie dich nicht verstehn,
Der du, ohne fromm zu sein, selig bist!
Das wollen sie dir nicht zugestehn. (WA-I, Bd. 6, S. 41)

明らかな秘密

親愛なるハーフィースよ、彼らはあなたを
神秘的な言葉づかいをする人だと言いました。
そして、彼ら、言葉の学者たちは

⁴ S. Becker, Carl: Das Buch Suleika als Zyklus. In: Studien zum West-östlichen Divan Goethes. Hg. von Edgar Lohner. Darmstadt 1971 (= Wege der Forschung 287).

言葉の価値というものが分かっていなかったのです。

あなたは彼らにとって神秘的だということです。
なぜならば彼らは的外れのことを考えているからです。
そして彼らのまがいもののワインを
あなたの名前を呼びながら注ぐのです。

あなたはしかし、神秘的で純粹です。
彼らがあなたを理解しないのは、
あなたが、敬虔ではないが、きわめて幸福だからです。
このことを彼らは認めようとしません。

この詩は、ハーフィースの詩的言語が凡人には理解されなかったことを伝えている。そして、そのハーフィースを数世紀後の西洋の詩人が賛美している。詩才のあるもの同士が、時空を超えて結びつくことができることを雄弁に語っている詩である。と同時に、この詩のタイトルである「明らかな秘密」は、ゲーテが好んで用いた表現であり⁵、言葉の普遍的な本質に言及している。詩の言葉は紙に記されて読者に提供されている。にもかかわらず、その言葉が伝えている秘密、ないしは真意を汲み取ることは、誰にでもできるわけではないのだ。

Wink.

Und doch haben sie Recht, die ich schelte:
Denn, daß ein Wort nicht einfach gelte,
Das müßte sich wohl von selbst verstehn.
Das Wort ist ein Fächer! Zwischen den Stäben
Blicken ein Paar schöne Augen hervor.
Der Fächer ist nur ein lieblicher Flor,
Er verdeckt mir zwar das Gesicht,
Aber das Mädchen verbirgt er nicht,
Weil das Schönste was sie besitzt,
Das Auge, mir in's Auge blitzt. (WA-I, Bd. 6, S. 42)

⁵ S. WA-I. Bd. 2, S.64, Bd. 10, S. 189 u. Bd. 15i, S.247. S. auch: Gespräch mit Eckermann. 3. Oktober 1828.

眼くばせ

でもやはり、私が叱責する彼らにももっともなところがあるのです。

というのは、言葉というものが単純ではないこと、

それはおそらく自明のことに違いないからです。

言葉というものは扇です！ 骨の間から

一對の美しい眼がのぞいています。

扇は愛らしいヴェールなのです。

顔を隠しはしますが、

その少女を隠すことはしません。

なぜなら、彼女が所有する最も美しいものである眼が

私の眼の中へ光を放つからです。

「明らかな秘密」につづくこの詩においては、言葉が扇、そしてヴェールに喩えられている。扇もヴェールも、背後にあるものをすっかり隠すことはない。見る者は、その正体をすっかり明かされることなく垣間見る。ここでも「明らかな秘密」である言葉の本質に言及されていることが伺える。ここで用いられているヴェールのモチーフは、ゲーテの生涯の詩作においてくりかえし用いられた重要なモチーフである⁶。ここでもオリエントを舞台としながらも、ゲーテが自分の言語観や詩作のモットーに忠実に創作していることを見てとることができる。

2. 愛

『西東詩集』成立の、もうひとつの大きな契機となったのは、マリアンネ・フォン・ヴィレマーとの恋愛だった。1814年、ゲーテはヴァイマールから自分の故郷であるライン河畔に旅行した折に、マリアンネとはじめて出会った。ヴァイマールに戻った後、将来『西東詩集』に収められることとなる詩が次々と生まれた。ハーテムと恋人ズライカの詩のやりとりからなる「ズライカの書」は、こうしたゲーテとマリアンネの恋愛を背景としている。愛しあう男女の対話形式からなるこの詩集においては、中世オリエントと近代ヨーロッパが時空を超えて呼応しあっている。そこには、愛の普遍的なあり方、言わば恋愛の原現象(Urphänomen)を垣間見ることが出来るように思われる。

⁶ S. WA-I. Bd. 1, S. 6f., 46, 220, 228, 314, 335, Bd. 2, S. 51, 184, Bd. 3, S. 130, 354, Bd. 4, S. 111, 121 usw.

Hatem.

Nicht Gelegenheit macht Diebe,
Sie ist selbst der größte Dieb;
Denn sie stahl den Rest der Liebe,
Die mir noch im Herzen blieb.

Dir hat sie ihn übergeben
Meines Lebens Vollgewinn,
Daß ich nun, verarmt, mein Leben
Nur von dir gewärtig bin.

Doch ich fühle schon Erbarmen
Im Carfunkel deines Blicks
Und erfreu' in deinen Armen
Mich erneuerten Geschicks.

Suleika.

Hochbeglückt in deiner Liebe
Schelt' ich nicht Gelegenheit;
Ward sie auch an dir zum Diebe,
Wie mich solch ein Raub erfreut!

Und wozu denn auch berauben?
Gib dich mir aus freier Wahl;
Gar zu gerne möcht' ich glauben —
Ja, ich bin's die dich bestahl.

Was so willig du gegeben
Bringt dir herrlichen Gewinn,
Meine Ruh, mein reiches Leben
Geb' ich freudig, nimm es hin!

Scherze nicht! Nichts von Verarmen!

Macht uns nicht die Liebe reich?

Halt' ich dich in meinen Armen,

Jedem Glück ist meines gleich. (WA-I, Bd. 6, S. 146f.)

ハーテム

機会が盗人を作るのではない、
機会それ自体が練達の盗人なのだ。
というも機会は私の心の中に残っていた、
愛の残りを盗んでしまったからだ。

機会はお前に私の人生の収穫すべてを、
譲り渡したのだ。
私はいまや貧しくなって、自分の人生では
お前のことだけを待ち焦がれている。

だが、わたしはすでに紅玉のような
お前の眼差しのなかに哀れみを感じている。
そしてお前の腕に抱かれて
新たな運命との出会いを喜んでいる。

ズライカ

あなたの愛によってたいそう幸せなので、
私は機会を叱ったりしません。
たとえ機会があなたのおかげで盗人になったとしても、
そのような盗みなら何と喜ばしいことか!

ところでいったい何のために盗むというのでしょうか？
あなたの身を自由な意志で私に捧げて下さい。
私はすすんで信じますとも、
そうです、私があなたを盗んだのです、と。

あなたがすすんで譲ったものは、
あなたにすばらしい収穫をもたらします。

私の平安、私の豊かな人生を
喜んで譲ります、お受け取りなさい!

冗談はよして、貧しくなるなんて!
愛は私たちを豊かにしているのではありませんか?
あなたを自分の腕に抱くとき、
私の幸福はいかなる幸福にも等しきものとなります。

1815年8月12日から9月17日まで、ゲーテは再度ヴィスバーデンにあるヴィレマー家の客人として過ごした。この頃はじめて、ハーテムとズライカによる対話形式の詩が生まれた。この詩は、マリアンネも創作に関わった最初の詩でもある。原作の詩は現存していないが、彼女の創作によるものであった。この詩においては、愛によって得られるものと失われるものについて、ハーテムとズライカがそれぞれの感慨を歌っている。失われたことについて嘆くハーテムに対して、得られたことの豊かさを讃えるズライカには、女性特有のしたたかさが感じられる。

Suleika.

Als ich auf dem Euphrat schiffte,
Streifte sich der goldne Ring
Fingerab in Wasserklüfte,
Den ich jüngst von dir empfing.

Also träumt' ich. Morgenröthe
Blitzt in's Auge durch den Baum,
Sag' Poete, sag' Prophete!
Was bedeutet dieser Traum?

Hatem.

Dieß zu deuten bin erbötig!
Hab' ich dir nicht oft erzählt,
Wie der Doge von Venedig
Mit dem Meere sich vermählt?

So von deinen Fingergliedern

Fiel der Ring dem Euphrat zu.
Ach zu tausend Himmelsliedern,
Süßer Traum, begeisterst du!

Mich, der von den Indostanen
Streifte bis Damascus hin,
Um mit neuen Caravanen
Bis an's rothe Meer zu ziehn,

Mich vermählst du deinem Flusse,
Der Terrasse, diesem Hain,
Hier soll bis zum letzten Kusse
Dir mein Geist gewidmet sein. (WA-I, Bd. 6, S. 149f.)

ズライカ：

私がユーフラテスを航行中に、
先日あなたから受け取った
金の指輪が指から抜けて
水の淵に落ちてしまいました。

そんな夢を見ました。朝焼けが
木を通して目に眩しいです。
詩人よ、予言者よ、おっしゃって、
この夢は何を意味するのですか？

ハーテム：

この夢は解釈できるとも！
私はお前にしばしば話したではないか、
ヴェネチアの総督が
海と契りを結んだくだりを。

同様にお前の指から
指輪はユーフラテス川に落ちたのだ。

ああ、甘き夢よ、お前が感動させてくれるので、
数多くの天の歌が生まれる！

私はインドスタンから
ダマスクスまでさまよった、
そして新たな隊商とともに
紅海まで向かった。

その私をお前はお前の川と、
丘と、この森と契りを結ばせる。
ここで最後の口づけに至るまで
私の心はお前に捧げよう。

ゲーテはヴィレマー家に最後となる滞在をしていた折、マリアンネはゲーテが彼女に贈った指輪が、マイン河で船に乗っているときに、指からすべって水中に落ちてしまった夢を見た。その夢がきっかけとなって、生まれた対話詩である。ズライカの詩の第2連における、*”Moregenröte...Prophete”*の脚韻においては、ゲーテ(Goethe)の名前が共鳴している。ハーテムの詩の第2連において「ヴェネチアの総督が／海と結婚したくだりを」とあるのは、ヴェネチアの総督はキリストの昇天の日に高価な指輪を海に沈めて、ヴェネチアと大海の契りの印としたことにもとづいている。ハーテムとズライカの対話詩として見事に成功しているこの詩の豊かな言葉づかいが、ゲーテとマリアンネの恋愛を契機としていることが如実に伺える。

Suleika.

Was bedeutet die Bewegung?
Bringt der Ost mir frohe Kunde?
Seiner Schwingen frische Regung
Kühlt des Herzens tiefe Wunde.

Kosend spielt er mit dem Staube,
Jagt ihn auf in leichten Wölkchen,
Treibt zur sichern Rebenlaube
Der Insecten frohes Völkchen.

Lindert sanft der Sonne Glühen,
Kühlt auch mir die heißen Wangen,
Küßt die Reben noch im Fliehen,
Die auf Feld und Hügel prangen.

Und mir bringt sein leises Flüstern
Von dem Freunde tausend Grüße;
Eh' noch diese Hügel düstern,
Grüßen mich wohl tausend Küsse.

Und so kannst du weiter ziehen!
Diene Freunden und Betrübten.
Dort wo hohe Mauern glühen,
Find' ich bald den Vielgeliebten.

Ach, die wahre Herzenskunde,
Liebeshauch, erfrischtes Leben
Wird mir nur aus seinem Munde,
Kann mir nur sein Athem geben. (WA-I, Bd. 6, S. 182f.)

ズライカ：

この動きは何を意味するのでしょうか。
東の風が私にうれしい知らせをもたらすのでしょうか。
風の翼のさわやかな身振りが
心の深い傷を冷やしてくれます。

愛撫しながら風は埃と戯れ、
軽やかな小さな雲を昇らせる。
虫の楽しげな小さな群れを
安全な葡萄のあずまやへ追いやる。

風は太陽の灼熱をやさしく鎮め、
私のほてったほおも冷やしてくれる、

過ぎ去りながら野や丘に輝く
葡萄の実に口づけをする。

そして私に風のかすかな囁きもたらすのは
友人の数多の挨拶。
このひと続きの丘が薄暗くなる前に
数多の口づけが私にもたらされる。

さあ、風よ吹いてゆけ！
友たちや悲しい人たちに仕えなさい。
あの高い壁が夕日で赤く輝くところで
私はまもなく最愛の人と会うのだ。

ああ、ほんとうのむねの知らせ、
愛の息吹、すがすがしい命を
私にもたらすのはあの人の口、
あの人の息だけがもたらしてくれるのだ。

1815年9月23日、ヴィレマー家はハイデルベルクを訪れた。その往路でマリアンネが書いたと思われる詩である。ゲーテは、マリアンネが作者であることに言及せずに、わずかな改変を加えて「ズライカの書」に採用した。「東の風はあわれな心の苦しみについて何を語ってくれるのだろうか？」というくだりが、中世のペルシア詩人ハーフィースの韻文にあるが、この箇所をマリアンネはゲーテ宛の手紙で引用していた⁷。

Auch in der Ferne dir so nah!
Und unerwartet kommt die Qual.
Da hör' ich wieder dich einmal,
Auf einmal bist du wieder da! (WA-I, Bd. 6, S. 172)

遠くにいてもあなたがとても近く思える！

⁷ Briefwechsel zwischen Goethe und Marianne von Willemar. Hg. von Theodor Creizenach. 3. Aufl. Stuttgart 1878, S.114.

そして予期せず痛みを覚える。

そのとき、私はまたあなたの声を聞く。

不意にまた、あなたはここにいるのだ！

この詩においては「遠」と「近」のモチーフが印象的に用いられている。遠く離れた恋人に想いを寄せて詩人が口ずさむとき、時間的、空間的な隔たりが解消されるのだ。恋愛の普遍的な特質が簡潔に、かつ雄弁に語られた詩である。この「遠」と「近」のモチーフは、マリアンネがゲーテに宛てた日付なしの手紙、あとから彼女がつけ加えたところによると、1819年10月の手紙の中においても見出すことができる。「遠くから、遠くへと、想いや言葉を送るというのは、いつでも困難な課題です。想いや言葉は、きわめて近くにいるときにだけ、うまく伝わるのですから⁸」。

おわりに

本稿では、オリエント礼賛で始まる『西東詩集』においても、ゲーテは要所要所で自分が感じ、考えていることを豊かな言葉づかいで綴っていることを確認してきた。言葉の空間の中で西洋と東洋の間を往き来している中で見えてくるのは、洋の東西を問わず認識することのできる人間存在の普遍性である。

Wer sich selbst und andre kennt

Wird auch hier erkennen:

Orient und Occident

Sind nicht mehr zu trennen. (WA-I, Bd. 6, S. 276)

自己と他者を知る者は、

ここでも了解することだろう：

東洋と西洋は

もはや分けることはできないのだ。

Sinnig zwischen beiden Welten

Sich zu wiegen lass' ich gelten;

⁸ Briefwechsel zwischen Goethe und Marianne von Willemar, S. 131.

Also zwischen Ost- und Westen

Sich bewegen, sei's zum Besten! (WA-I, Bd. 6, S. 276)

思慮深く両方の世界の間を
揺れ動くことを私はよしとする。
だから東と西の間を
往き来することが最上なのだ!

人間存在の普遍性は、本稿において取り上げたテーマ以外にも数多く歌われている。

Im Athemholen sind zweierlei Gnaden:

Die Luft einziehen, sich ihrer entladen;

Jenes bedrängt, dieses erfrischt;

So wunderbar ist das Leben gemischt.

Du danke Gott, wenn er dich preßt,

Und dank' ihm, wenn er dich wieder entläßt. (WA-I, Bd. 6, S. 11)

息をすることには2つの恵みがある。
空気を取り込み、空気から解放される。
前者は圧迫し、後者はさわやかにする。
かくも見事に生は混ざり合っているのだ。
神がおまえを圧迫するとき、神に感謝せよ。
そして神がまたおまえを解放するときにも、感謝したまえ。

この詩においては呼吸の恵みが歌われているが、呼気と吸気は、自然界に数多く存在する両極性の一つに他ならない。両極性は、ゲーテが自然科学研究から得た貴重な知見である⁹。『西東詩集』には、ほかにも「ズライカの書」において光と闇を取り上げた詩「再会」(Wiederfinden)が収録されている(WA-I, Bd. 6, S. 188f.)。もとより『西東詩集』という題名自体が両極性に言及している。西洋と東洋、文学と実人生、あるいはまた、文学と自然科学。我々は『西東詩集』において、ゲーテが両方の世界を往き来しつつ実り豊かなものを余すところなく吸収し、そして、そこから人間存在の普遍性に関わることを、豊かな詩的言語で紡ぎ続けたことを確認することができるのである。

⁹ S. WA-I. Bd. 34i, S. 323, Bd. 47, S. 15, WA-II. Bd. 1, S. 276, 297, 305, Bd. 3, S. 115, Bd. 4, S. 303, 307, 387 usw.

<参考文献>

- Johann Wolfgang Goethe: Werke. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. Weimar 1887-1919.
- Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke, Briefe, Tagebücher und Gespräche. Hrsg. v. Dieter Borchmeyer u. a. 40 Bde., 2 Abt. Frankfurt a. M.: Klassiker 1985ff.
- Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Hrsg. v. Karl Richter. 20 Bde. in 25 Teilen. München: Hanser 1985ff.
- Briefwechsel zwischen Goethe und Marianne von Willemar. Hg. von Theodor Creizenach. 3. Aufl. Stuttgart 1878.
- Abdel-Rahim, Said H.: Goethe und der Islam. Berlin 1969.
- Bahr, Ehrhard: Die Ironie im Spätwerk Goethes. >>... diese sehr ernsten Scherze...<<. Studien zum >West-östlichen Divan<, zu den >Wanderjahren< und zu >Faust II<. Berlin 1972.
- Becker, Carl: Das Buch Suleika als Zyklus. In: Studien zum West-östlichen Divan Goethes. Hg. von Edgar Lohner. Darmstadt 1971 (= Wege der Forschung 287).
- Henckmann, Gisela: Gespräch und Geselligkeit in Goethes "West-östlicher Divan". Stuttgart 1975.
- Ileri, Esin: Goethes "West-östlicher Divan als imaginäre Orient-Reise. Sinn und Funktion. Frankfurt am Main und Bern 1982.
- James Boyd: Notes to Goethe's Poems. Bd. 2. 3. Auflage. Oxford 1958.
- Kommerell, Max: Gedanken über Gedichte. 4. Auflage. Frankfurt am Main 1985.
- Korff, Hermann August: Der Geist des Westöstlichen Divans. In: Ders. Die Lebensidee Goethes. Leipzig 1923.
- Korff, Hermann August: Goethe im Bildwandel seiner Lyrik. Bd. 2. Hanau 1958.
- Krüger, Hans-Peter: Goethes Sprachstil im "West-östlichen Divan". Hamburg 1958.
- Lemmel, Monika: Poethologie in Goethes west-östlichem Divan. Heidelberg 1987.
- Müller, Joachim: Lyrische Naturspiele in Goethes "Westöstlichem Divan". In: Goethe und die Wissenschaften. Hg. von Helmut Brandt. Jena 1984.
- Mommsen, Katharina: Goethe und die arabische Welt. Frankfurt am Main 2001.
- Mommsen, Katharina: Goethe und Islam. Frankfurt am Main 2001.
- Mommsen, Katharina: Goethe und Diez. Berlin 1961.

Puritz, Hans: Goethe und Marianne von Willemer. Stuttgart 1948.

Puritz, Hans: Marianne von Willemer. Berlin 1944.

Schaeder, Hans Heinrich: Goethes Erlebnis des Ostens. Leipzig 1938.

Stöcklein, Paul: Wege zum späten Goethe. Dichtung. Gedanken. Zeichen. Interpretationen um ein Thema. 3. Auflage. Darmstadt 1977.

Wertheim, Ursula: Goethe und Hafis. In: Beiträge zur Literaturgeschichte und -methodologie. Gemeinsamer Studienband von Germanisten der Friedrich-Schiller-Universität Jena und der Alexander-von-Luca-Universität Jasi. Hg. von Horst Fassel, Klaus Hammer. Jena 1982.

Ziolkowski, Theodore: Der Karfunkelstein. In: Euphorion. Bd. 55. Heidelberg 1961.